

語彙的複合動詞の意味構造と意味関係

—語彙化の角度から

LCS and Semantic Relation of Lexical Compound Verbs —A Lexicalization Perspective

史 曼

SHI Man

提要 由具有实义的两个动词所构成的日语词汇型复合动词中，V1 与 V2 的语义关系受限，仅有手段、原因、并列和方式四种，且其中手段关系复合动词所占比例最大。关于该现象的语义机制，已有研究并未进行充分解释。本文在收集大量数据的基础上，利用词汇化理论，提出词汇型复合动词的语义结构，进而考察其语义关系。分析表明，单个动词的词汇化模式为“方式”、“结果”、“方式+结果”，而词汇型复合动词为词汇化而成的单个动词，具有单一事件的语义结构。复合动词的语义关系受限性及数量分布差异均由复合动词整体的语义结构决定。

キーワード：意味構造 意味関係 語彙化 様態 結果

目次

1. はじめに
2. 単純動詞の語彙化と意味構造
3. 語彙的複合動詞の意味構造と意味関係
4. おわりに

1. はじめに

影山（1993、1999）、由本（2005）等によれば、日本語における語彙的複合動詞は前項動詞（以下 V1 と略す）と後項動詞（以下 V2 と略す）の意味関係によって次の五種類に分けられている。

- (1) a.手段：V1 することによって、V2

切り倒す、踏み潰す、押し開ける、折り曲げる、切り分ける、むしり取る

b. 様態 : V1 しながら V2

尋ね歩く、遊び暮らす、忍び寄る、舞い上がる、持ち去る、探し回る

c. 原因 : V1 の結果、V2

歩き疲れる、抜け落ちる、溺れ死ぬ

d. 並列 : V1 かつ V2

泣き喚く、忌み嫌う、恋い慕う、慣れ親しむ

e. 補文関係 : V1 という行為／出来事を (が) V2

見逃す、死に急ぐ、聞き漏らす、晴れ渡る、使い果たす、呼び交わす

影山 (1999:195)

このうち、「補文関係複合動詞」における V2 は語彙的意味が希薄化しているため、本論では扱わないことにする。実質的意味を持つ「手段」「原因」「様態」「並列」タイプの複合動詞は V1 と V2 から構成され、複合事象を表す動詞である。しかし、同じ複合事象を表す「テ形」連接では意味関係がより多様で、例えば、「手段」「原因」「様態」「並列」以外に、「継起」(朝起きて顔を洗う)、「逆接」(知っていて教えてくれない)なども表すことができる。それでは、なぜ語彙的複合動詞は「テ形」連接と違って、意味関係が四つに限られているのであろうか。

また、陳 (2013) によれば、意味関係による語彙的複合動詞の分類では、手段関係動詞が 1300 語で圧倒的に多く、次いで原因関係複合動詞 151 語、様態関係複合動詞 123 語、並列関係複合動詞 93 語である。それでは、なぜ各分類の生産性にばらつきがあり、手段関係複合動詞が圧倒的に多いのであろうか。

影山 (2013:9) は、語彙的複合動詞の V1 と V2 の意味関係は V2 の意味構造からかなりの程度まで予測できると指摘しているが、それについて詳論してはいない。本稿は語彙化の角度から、語彙意味論の枠組みにおいて、データを収集し、語彙的複合動詞の意味構造を提示した上で、V1 と V2 の意味関係について考察する。

本論の構成は次の通りである。まず、第 2 節では、Rappaport Hovav & Levin (2010) の語彙化理論によって単純動詞の語彙化および意味構造について考察する。第 3 節で、語彙的複合動詞の語彙化タイプおよび意味構造について考察し、意味関係を分析する。第 4 節はまとめと今後の課題である。

2. 単純動詞の語彙化と意味構造

語彙意味論の枠組みでは、「語彙化」を共時的意味で用いて、事象が一語にコード化されることを「語彙化」として捉えている。Levin & Rappaport Hovav (2008)、Rappaport Hovav & Levin (2010) の一連の研究では、動詞の意味は構造的意味 (eventschema) と、その動詞

の個別的な意味を表す“root”によって構成されると分析している。そして、(2) の意味構造（語彙概念構造 Lexical Conceptual Structure, LCS）に示すように、“root”と“event schema”の結びつき方の相違によって、動詞を大きく Manner Verbs（様態動詞）と Result Verbs（結果動詞）に分類している。様態動詞は様態が指定されているが、結果は不問に付されている。一方、結果動詞は結果が指定されているが、その結果を引き起こす様態は含まれていないという。

(2) a. 様態動詞：行為の様態を特定する動詞

LCS: [[x ACT <MANNER>(ON)y]

b. 結果動詞：変化結果を特定する動詞

LCS: [[x ACT ON y]CAUSE [y BECOME AT <z>]]
[y BECOME AT <z>]

例えば、(3a) のように、“wipe”の結果としては“dirty”、“sticky”、“wet”など多くの可能性があり、結果が指定されていない。また、(3b) のように、“clean”は様々な手段を利用することができ、手段が指定されていないことがわかる。したがって、“wipe”が「様態動詞」、 “clean”が「結果動詞」となる。

(3) a. I just wiped the table, but it’s still dirty/sticky/wet.

b. I cleaned the dress by soaking it in hot water/pouring bleach over it/saying “abracadabra”.

(Levin & Rappaport Hovav 2008:1)

Levin & Rappaport Hovav (2008)、Rappaport Hovav & Levin (2010) 等はこのように動詞を「様態動詞」と「結果動詞」に二分しているが、Goldberg (2010)、Beavers & Knootz-Garborden (2012) 等は殺害様態動詞 (drown, hang, guillotine)、料理様態動詞 (blanch, braise, broil) を取り上げ、「様態・結果動詞」も存在すると述べている。本稿はこれらの先行研究を参考にし、動詞を「様態」「結果」「様態+結果」の三種類に分ける。つまり、「一語」が表す可能な意味は「様態」「結果」「様態+結果」であるとするとする。それぞれの LCS を次のように示す¹⁾。

(4) a. 様態動詞 LCS: [x ACT <MANNER>(ON)y]

b. 結果動詞 LCS: [[x ACT]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]
[y BECOME BE AT <state>]

c. 様態・結果動詞 LCS: [[x ACT <MANNER>]CAUSE[y BECOME BE AT <state>]]

様態動詞は[ACT]という上位事象しか持っていない。一方、結果動詞も様態・結果動詞も上位事象と結果事象からなる複合事象を表すが、結果動詞における上位事象は指定されていないのに対して、様態・結果動詞は上位事象も結果事象も指定されている。(4) の LCS からわかるように、一語が表しうる最大限の意味は「様態・結果動詞」である。

史曼 (2015) では、日本語の単純動詞をまず大きく様態動詞、結果動詞、様態・結果動詞に分類し、そして移動事象か状態変化事象か、自動詞か他動詞かという要素を考慮に入れ、さらに下位分類した。具体的には様態動詞をさらに行為状態、移動様態、働きかけ動詞の三つに分類し、結果動詞を状態変化、移動経路、使役変化／移動動詞に分類した。本稿はこの史曼 (2015) の分類に基づき、『分類語彙表増補改訂版』から動詞を 2883 語収集し、各タイプの数を調査した。日本語単純動詞の語彙化タイプ、意味構造および量的分布を示すと表 1 のようになる。

表 1²⁾ 語彙化タイプ、意味構造および量的分布

語彙化タイプ		LCS	語例	数量	
様態	行為様態	[x ACT<MANNER>]	笑う、叫ぶ、遊ぶ、働く	227	729
	移動様態	[x MOVE<MANNER>]	歩く、走る、駆ける	13	
	働きかけ	[x ACT<MANNER>ON y]	蹴る、叩く、殴る、掃く	489	
結果	状態変化	[y BECOME BE AT<state>]	壊れる、潰れる、切れる	885	2144
	移動経路	[y MOVE[path z]]	落ちる、上がる	83	
	使役変化／移動	[[x ACT ON y]CAUSE[y BECOME BE AT<state>]]	壊す、切る、開ける、下げる、上げる、降ろす	1187	
様態・結果		[[x ACT<MANNER> ON y]CAUSE[y BECOME AT<state>]]	切る、刻む、塗る、吊る、煮る、刈る、研ぐ、縛る、盛る、巻く	10	

この表からわかるように、語彙化タイプからみれば、「結果」タイプが最も多く 2144 語であり、「様態・結果」タイプは最も少なくわずか 10 語である。また、意味構造から動詞の量的分布をみれば、使役変化・移動動詞が最も多く 1187 語である。

3. 語彙的複合動詞の意味構造と意味関係

3.1 語彙的複合動詞の語彙化タイプ

Rappaport Hovav & Levin (2010) 等の研究は複合動詞について言及していないが、日本語の語彙的複合動詞も語彙化された一語である。これについて影山 (1993) は、語彙的複合動詞が形態的まとまりを構成し、語彙的選択制限を備えていることから、一語としての資格を確認した。また由本 (2005) は、複合動詞はもともと二つの動詞概念として存在して

いた LCS が単一の動詞概念として機能するように合成すると述べている。つまり、複合動詞は単純動詞と同じ「一語」であり、複合動詞の意味構造は V1 と V2 の意味構造が複合され、単一事象としての意味構造をもっている。

前節で述べたように、「一語」が表す可能な意味は「様態」「結果」「様態+結果」の三つである。語彙的複合動詞は語彙化された一語なので、一語としての意味構造に制限されると考えられる。つまり、語彙的複合動詞も単純動詞と同様に、「様態」「結果」「様態+結果」のいずれかになる。それでは、実際に語彙的複合動詞の語彙化、意味構造がどのようなになっているのか見てみよう。史曼 (2015) は、国立国語研究所の『複合動詞レキシコン』から 1272 語を抽出し、複合動詞における V1 と V2 のそれぞれの語彙化タイプについて調査した結果を表 2 のように示している。この表からわかるように、「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞が最も多く、「結果+結果」、「様態+様態」は生産性が低い。なお、「結果+様態」タイプの複合動詞は収集されていない。

表 2：語彙的複合動詞の語彙化タイプ (1272 語)

語彙化タイプ	様態+様態	結果+結果	様態+結果	結果+様態
語数	47	167	1058	0

(史曼 2015 : 56)

3.2 語彙的複合動詞の意味構造

前述したように、語彙的複合動詞は V1 と V2 の意味構造が融合したもので、単一事象としての意味構造を持つ。それでは、二つの動詞の意味構造はどのように融合されるのであろうか。以下では V1 と V2 の語彙化タイプが同じ場合と異なる場合に分けて考察する。

3.2.1 V1 と V2 が異なる語彙化タイプの場合

本節ではまず生産性が最も高い「様態+結果」タイプの複合動詞の意味構造を考察する。日本語の複合動詞は意味的、統語的に基本的に「右側主要部」なので、V2 の意味構造がベースになり、V1 の意味構造がそれに融合されると考えられる。「様態+結果」タイプにおける V2 が使役変化/移動動詞、状態変化動詞、移動経路動詞の三つの種類がある。

V2 が使役変化/移動動詞の場合、収集した複合動詞をみると、ほとんどの V1 は「打つ」「押す」などといった働きかけ動詞である。例えば、(5) のような動詞である。

(5) 「様態+結果」① 「働きかけ+使役変化/移動」例

打ち上げる、蹴り上げる、投げ上げる、押し上げる、引き上げる、
持ち上げる、叩き壊す、殴り倒す、蹴り崩す、押し開ける...

V2 が使役変化/移動動詞の場合、結果は指定されているが、上位事象における「様態」が空白である。(6) に示されるように、V1 はその空白部分を補充し、V2 の LCS と融合して

「様態」も「結果」も指定される「様態・結果」動詞になる。V2 が使役事象を表し、V1 は V2 が表す使役事象を達成させるために行う具体的な行為であるため、V1 と V2 の意味関係は手段関係になる。

(6) 「様態+結果」① 「働きかけ+使役変化/移動動詞」の LCS

a. V2 の LCS: [x ACT<空白>ON y] CAUSE [y BECOME BE AT <state>]]

b. V1 の LCS: [x ACT<MANNER>ON y]

→c. [[x ACT<MANNER>ON y] CAUSE [y BECOME BE AT <state>]]

V2 が状態変化動詞の場合、収集した例は (7) のように、「遊び疲れる、歩き疲れる、泣き疲れる、話し疲れる、待ちくたびれる」など少数である。そして、V2 は「疲れる、くたびれる」などに限られている。

(7) 「様態+結果」② 「行為様態+状態変化」例

遊び疲れる、歩き疲れる、泣き疲れる、話し疲れる、待ちくたびれる

第 2 節の表 1 からわかるように、状態変化動詞の LCS は変化結果という下位事象しか持っておらず、その LCS には“CAUSE”がないはずである。例えば、「壊れる、倒れる」などの動詞は様態動詞と組み合わせることができない。しかし、「疲れる」「くたびれる」は「壊れる」などの状態変化動詞と異なり、何らかの原因が必要であると考えられる。これについて、Hidaka (2011:60) は「*健は自ら疲れた」という例を取り上げ、「疲れる」には外的原因が必要であることを指摘している。また、日高 (2018) によれば、「疲れる」は「疲れた状態になる」という意味であるが、その変化が成立するための前提や慣習的推意として「活動」を含むイベントが指定されている。つまり、「何かをやってそれによって疲れる」という意味であると考えられる。したがって、「疲れる」の LCS は (8) のように示すことができる。V1 は「疲れる」という状態を引き起こす主体自身の行為を表すものに限られる。例えば、「歩く、遊ぶ、泣く」などは V2 「疲れる」の背景にある原因を明示化し、V1 と V2 の意味関係は原因/結果になるわけである。

(8) 「様態+結果」② 「行為様態+状態変化」の LCS

a. V2 の LCS: [] CAUSE [x BECOME BE AT <state>]]

b. V1 の LCS: [x ACT<MANNER>]

→c. [x ACT<MANNER>] CAUSE [x BECOME BE AT <state>]]

V2 が移動経路の場合については、(9) のように「駆け上がる、飛び上がる、飛び出る、這い出る、歩き出る」などの複合動詞が収集された。V2 が移動経路であり、その LCS は (10) のように示す。移動の様態が指定されていないため、V2 の LCS をベースとして、V1 移動様態動詞の LCS がその空白部分に挿入され、「様態+結果」動詞になる。この場合、

V1はV2の移動経路を修飾する「様態」であり、V1とV2の意味関係は様態関係になる。

(9) 「様態+結果」③ 「移動様態+移動経路」例

駆け上がる、飛び上がる、飛び出る、這い出る、歩き出る、流れ出る

(10) 「様態+結果」③ 「移動様態+移動経路」のLCS

a. V2のLCS: [y MOVE<空白> [path down]]

b. V1のLCS: [y MOVE<MANNER>]

→c. [y MOVE<MANNER> [path down]]

以上、「様態+結果」タイプの語彙的複合動詞のLCSについて考察してきた。V2の意味構造から、V1とV2の意味関係は自ずと導かれる。V2が使役変化/移動動詞の場合、V1が変化結果を引き起こす「手段」になる。また、V2が状態変化の場合、移動経路を修飾する「様態」になる。

3.2.2 V1とV2が同じ語彙化タイプの場合

次に「様態+様態」タイプの複合動詞について考察する。『複合動詞レキシコン』から収集された「様態+様態」タイプの複合動詞はわずか47語であった。これらの例を詳しく検討すると、次の二種類があることがわかる。一つはV1、V2の意味が似ている場合、もう一つはV1、V2の意味が異なる場合である。

V1、V2意味が似ている場合、例えば、「飛び跳ねる、駆け走る、泣き喚く、写し描く、褒め称える」など、これらの複合動詞は同じ語彙化タイプおよび似たLCSを有しているため、V1とV2の“root”が同じスキーマに融合される。例えば、「泣き喚く」において、「泣く」も「喚く」も「行為様態」動詞であり、そして、似たLCSを持っているため、複合動詞全体のLCSは(11)のようになる。この場合、V1とV2は並列関係になる。

(11) 「様態+様態」① V1とV2が意味が類似している場合

a. V1のLCS: [x ACT<MANNER1>]

b. V2のLCS: [x ACT<MANNER2>] (Manner1≈Manner2)

→c. [x ACT<MANNER1+2>]

V1、V2意味が異なる場合、例えば、「遊び暮らす、泣き暮らす、持ち歩く、連れ歩く、飲み歩く、教え歩く、売り歩く、訪ね歩く、練り歩く」などの動詞がある。これらの複合動詞において、ほとんどのV2は「暮らす」「歩く」のような様態性が弱い動詞である³⁾。このため、V2の様態をより詳しく指定するV1と組み合わせて複合動詞となることができる。例えば、(12)のように、V1はV2のLCS (root) を修飾する形で二つの動詞のLCSが融合し、複合動詞全体はACTスキーマを有する様態動詞になる。この場合、V1とV2は修飾関係にあり、いわゆる様態関係になる。

(12) 「様態+様態」② V1 と V2 が意味が異なる場合

a. V2 の LCS: [x ACT<LIVING>]

b. V1 の LCS: [x ACT<PLAYING>]

→c. [xACT<LIVINGWITHPLAYING>]

「結果+結果」タイプの複合動詞も生産性が低く、『複合動詞レキシコン』から収集されたものはわずか167語であった。本来、「一義的経路の制約」⁴⁾により、複合動詞に二つの変化結果を表すことはできない。それでは、実際に「結果+結果」タイプの複合動詞はどのように一つの語として成立しうるのであろうか。ここで「V1 と V2 意味が似ている場合」と「V1 と V2 の意味が異なる場合」に分けて考察する。

まず、V1 と V2 意味が似ている場合、「折れ曲がる、痩せ細る、通り抜ける、過ぎ去る」のような複合動詞がある。これは「様態+様態」と同様、V1 と V2 が似た LCS を持っているため、同じ LCS が一つに融合され、複合動詞全体の LCS が (13) のようになる。同じ語彙化タイプ、もしくは似た LCS を有する二つの動詞からなる複合動詞の意味関係は並列になるわけである。V1 と V2 における「結果」が類似しているので、「一義的経路」の制約に違反しない。

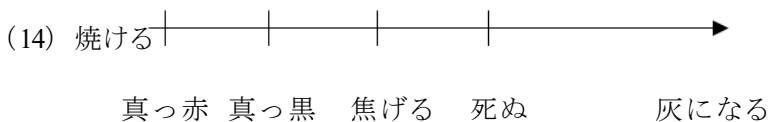
(13) 「結果+結果」① V1 と V2 の意味が類似している場合

a. V1 の LCS: [y BECOME AT <z1>]

b. V2 の LCS: [y BECOME AT <z2>] (z1≈z2)

→c. [y BECOME AT <1+2>]

V1 と V2 の意味が異なる場合、「焼け焦げる、焼け死ぬ、凍え死ぬ」といった複合動詞がある。これらの複合動詞では、V1 は状態変化動詞であるが、その変化結果には段階性、程度性を備えていると考えられる。陳 (2009) が分析したように、「焼ける」には「真っ赤に焼ける」、「真っ黒に焼ける」、「灰になる」などの段階性がある。(14) に示すように、「焼け焦げる」「焼け死ぬ」における V2 は V1 の結果をさらに指定する役割を果たしていると考えられる。複合全体の LCS は、(15) に示すように、V2 の結果と一致するため、これも「一義的経路の制約」に違反しない。また、意味関係についてであるが、V1 が起き、その結果としていくつかの変化結果が起きる可能性があり、V2 がその変化結果の一つであるということから考えると、V1 と V2 は原因/結果関係になる。



(15) a. V1 の LCS: V1 [y BECOME BE AT<z1>]

b. V2 の LCS : V2 [y BECOME BE AT<z2>] $z2 \in z1$

→c. [y BECOME BE AT<z2>]

3.3 語彙的複合動詞の意味関係

ここまで、語彙的複合動詞の語彙化タイプおよび意味構造について分析してきた。ここで第1節の二つの問題について考えたい。

まず問題1「語彙的複合動詞の意味関係が限られているのはなぜか」については、意味関係が限定されているのは意味構造がそのようにできているからである。具体的には、「様態+結果」タイプの複合動詞では、①V2は使役変化/移動動詞の場合、例えば、「叩き壊す」において、V1はV2の空白になっている様態を補充し、使役事象を達成させる手段になるため、「手段関係」複合動詞になる。②V2が状態変化動詞の場合、例えば「歩き疲れる」におけるV1はV2の変化結果を引き起こす行為であるため、「原因/結果関係」複合動詞になる。③V2が移動経路動詞の場合、例えば、「駆け上がる」におけるV1は移動を行うときの様態を修飾するため、「様態関係」複合動詞になる。

「様態+様態」タイプの複合動詞では、①V1とV2の意味が類似している場合、似た“root”が同じスキーマに融合され、「並列関係」複合動詞になる。②V1とV2の意味が異なる場合、V2はV1の様態をさらに指定する動詞であるため、「様態関係」複合動詞になる。また、「結果+結果」タイプの複合動詞では、①V1とV2の意味が類似している場合、「並列関係」複合動詞になる。②V1とV2の意味が異なる場合、V2がV1の引き起こした変化の一つであるため、「原因/結果関係」複合動詞になる。

問題2「手段関係」複合動詞が圧倒的に多いのはなぜか」については、第2節の表1からわかるように、日本語の単純動詞では「結果」タイプが一番多く、そのうち使役変化・移動動詞が最も多い。これらの動詞のLCSの上位事象である様態が指定されていないため、様態動詞と融合し、「手段関係」複合動詞になる。この動機付けおよび使役変化・移動動詞の数の多さから、「手段関係」複合動詞が最も多いとわかる。

4. おわりに

本稿は二つの動詞の意味構造がどのように単一事象としての意味構造に融合されるのかについて分析したうえで語彙的複合動詞におけるV1とV2の意味関係について研究した。その際、Rappaport Hovav & Levin (2010)などの語彙化理論に基づき、日本語の単純動詞を大きく「様態」、「結果」、「様態+結果」に分けた。これにより、一語が表す最大限の意味構造は「様態+結果」であることがわかる。語彙的複合動詞も語彙化された「一語」であるため、単純動詞と平行な意味構造を持って、最大限の意味構造は「様態+結果」

になると考えられる。

語彙的複合動詞は語彙化された一語であり、単一事象としての意味構造を持っている。語彙的複合動詞 V1 と V2 の意味関係は複合動詞全体の意味構造から導き出される。また、意味関係が限定されているのは、複合動詞の意味構造がそのようにできているからであると考えられる。手段関係複合動詞が最も多いのは、「様態+結果」タイプには十分な動機付けがあり、そして使役変化・移動動詞が最も多いためである。

本稿は日本語における複合動詞の語彙化について分析したが、今後は他の言語の複合述語、特に中国語の複合動詞の語彙化の問題と対照してさらなる研究を行いたい。

注

- 1)これに関する詳しい分析は史曼 (2015) を参照。
- 2)この表中の数字はあくまで傾向を示すものであり、絶対的な数値ではない。
- 3)『明鏡国語辞典』(第二版)によると、これらの複合動詞における「歩く」は「あちこちを動き回る」という意味で、「暮らす」は「日々を送る」という意味である。両方とも様態性が弱いと考えられる。
- 4)「一義的経路の制約 (The Unique Path constraint:Goldberg1995:82)」とは：X が具体物の場合、単文内でX を 2 つ以上の異なる経路 (Path) について叙述することができない。

参考文献

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房。
 ——— (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版。
 ——— (2013) 「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」 影山太郎(編) 『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて』 ひつじ書房。
 日高俊夫 (2018) 「Vテ Vにおける再分析—複合動詞との統一的分析にむけての覚え書き」 『九州国際大学国際・経済論集』 第 2 号、現代ビジネス学会: 17-38。
 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た英語の動詞形成』 ひつじ書房。
 何志明 (2010) 『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から』 笠間書院
 陳劭憚 (2009) 「結果複合動詞の語形成の意味条件と生産性」 『言語科学論集』 13、東北大学大学院文学研究科: 83-94。
 ——— (2013) 『現代日本語の複合動詞の研究』 博士論文 東北大学大学院文学研究科。
 史曼 (2015) 《基于事件结构理论的日语复合动词自他交替现象的研究》 北京: 科学出版社。
 Beavers, John and Andrew Koontz-Garboden (2012) Manner and Result in the Roots of Verbal Meaning. *Linguistic Inquiry*, 43: 331-369.

Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*,
University of Chicago Press

———(2010) Verbs, constructions and semantic frames. In E. Doron, M. Rappaport-Hovav, and I. Sichel
(eds.), *Syntax, Lexical Semantics, and Event Structure*, Oxford: Oxford University Press: 39–57.

Hidaka, Toshio (2011) *Word formation of Japanese V-V compounds*. Kobe Shoin Women's University
Dissertation

Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (2008) Lexicalized manner and result are in complementary
distribution. Paper presented at IATL 24, Jerusalem, October 26-27.

Rappaport Hovav, M. and B. Levin (2010) Reflections on Manner/Result Complementarity, in E. Doron,
M. Rappaport Hovav, and I. Sichel, eds., *Syntax, Lexical Semantics, and Event Structure*, Oxford
University Press, Oxford, UK: 21-38

【データベース】

『複合動詞レキシコン (開発版 V2)』 国立国語研究所 <https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/>

『分類語彙表増補改訂版』 国立国語研究所 https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/goihyo.html

付記

本稿は中国国家社会科学基金 (課題番号 18CYY056) の支援を受けたものである。